

### 3. 歴史的環境

#### (1) 大分市の歴史概観

##### ①先史時代

##### ■旧石器時代

本市にある旧石器時代の遺跡としては、一方平<sup>いっぽうびら</sup> I 遺跡<sup>いち</sup>が知られており、その年代は、鹿児島湾北部にある始良カルデラの火山灰降灰以降となる約25,000～20,000年前頃と位置付けられている。

一方平 I 遺跡<sup>いっぽうびらいち</sup>は、鶴崎<sup>つるさき</sup>台地上にあり、大量の石核、剥片とナイフ形石器、剥片尖頭器<sup>はくへんせんとうき</sup>など2,500点を超える石器が出土している。石器の製作技術を復元できる接合資料も得られており、付近で採取できる流紋岩・ホルンフェルス<sup>れき</sup>の礫を原石として石器が製作される場であったこと、また、遺跡の場所が繰り返し利用されていたことが推定されている。この他の市内で発見されている旧石器時代遺跡の多くは概ね小規模であり、一方平 I 遺跡のような遺跡を拠点としつつ移動し、移動先で小規模なキャンプ遺跡を形成するという、当時の狩猟採集生活の状況が分かる。

##### ■縄文時代

縄文時代早期末から後期にかけての代表的な遺跡として、国の史跡である横尾貝塚<sup>よこお</sup>がある。横尾貝塚<sup>おおのがわ</sup>は、大野川支流の乙津川沿いの段丘上にある遺跡で、縄文海進によって内湾化した縄文時代早期末から遺跡が形成され、前期から中期にかけて貝塚が形成される。中期の貝塚上には土壇墓<sup>どこうぼ</sup>も造られており、17体分の人骨が出土している。後期には谷部にドングリを貯蔵するための穴が多数掘られている。横尾貝塚では長期にわたって、災害を含む環境変化や生態系の変化に対応しながら集落が断続的に営まれていたことが解明されている。また、複数の大型黒曜石<sup>こくようせき</sup>石核やカゴに収納された黒曜石の剥片が出土しており、当時の重要な石器材料である姫島産黒曜石<sup>ひめしま</sup>が別府湾の水上ルートを通じて内陸に搬入されたこと、横尾貝塚がその経路にあたっていたことも判明している。

※ホルンフェルス:マグマの熱で温められた地層の影響を受けて出来た岩のこと。



一方平 I 遺跡



横尾貝塚で発見された大型黒曜石石核

やよい  
**■ 弥生時代**

早期の遺跡としては、河川沿い微高地である植田市遺跡などで粘土の帯をはりつけた「突帯文土器」が出土しており、この段階で稲作が行われていた可能性がある。

前期末から中期には、米竹遺跡や下郡遺跡で貯蔵穴を多数伴う集落遺跡が発見されている。下郡桑苗遺跡ではブタの頭骨が出土したほか周辺の旧河道では木製農耕具が多量に出土しており、弥生時代中期には稲作やブタの飼育が行われていたことが分かる。

弥生時代後期には、大規模な溝で集落の周りを囲んだ防御的集落である環濠集落が多く形成されており、下郡遺跡、雄城台遺跡、賀来中学校遺跡などが知られている。



下郡桑苗遺跡で出土したブタの頭骨



下郡遺跡の弥生時代後期環濠

**■ 古墳時代**

3世紀の中頃に畿内の大和地方を中心に初期国家が成立した。古墳時代には各地の首長が造営する前方後円墳をはじめとする古墳の形や大きさによって、畿内政権との関係や権威の大小が表示されていたと考えられている。古墳時代の古墳時代の大分市域では、古代に海部郡となる大野川流域以東の地域(海部地域)と大分郡となる大分川流域を中心とする地域(大分地域)とがあり、それぞれ系譜的に地域の首長墓として古墳が築造されるようになる。

海部地域では、4世紀中頃の上ノ坊古墳、野間古墳群から前方後円墳が築造され、5世紀初めから前半にかけては県下最大級の亀塚古墳やこれに次ぐ規模の築山古墳が連続し、5世



築山古墳



先史時代の主要な遺跡と古墳



紀末のこかめづか小亀塚古墳まで大型古墳の系譜が続く、海部地域の古墳の方が著しく大きいことは、畿内政権が大陸との交通の担い手として海部の首長との関係を重視していたことを示すと考えられる。

大分地域では、4世紀のきつこう亀甲古墳から古墳が築造されはじめ、4世紀中頃のほうらいさん蓬来山古墳以降、6世紀初めのせんじんづか千人塚古墳まで前方後円墳が築造される。6世紀後半以降の首長墓としては巨石を用いた大型の横穴式石室を有するこうぼうあな弘法穴古墳、うしどの丑殿古墳、千代丸古墳が系譜的に築造される。弘法穴古墳に近いふるごう古国府遺跡群では7世紀前半の大型建物跡が発見されており、7世紀代における政治的な中心地であったことが推定される。千代丸古墳は玄室内部に線刻が描かれるとともに赤色顔料が塗られている市内唯一の装飾古墳で、7世紀初めの築造と考えられている。

首長墓の最後のものは7世紀中頃～後半の古宮古墳で、同時期の畿内の中級貴族の墓と同じくくりぬき式の「石棺式石室」(巨石をくりぬいた石室)をもっており、『日本書紀』に壬申の乱で活躍したことが記されたおおいたのきみ え さか「大分君恵尺」の墓と推定されている。なお、両地域ともに6世紀中頃～7世紀には集団墓として横穴墓が盛行し、平野を望むきゅうりょうがけめん丘陵崖面などに多く造られている。



古宮古墳

## ② 古代

古代の大分市域は、大分郡あまべ東部から海部郡北部にあたる。大分郡にはぶんごのくに豊後国の政治・経済・文化の中心である「国府」が置かれていた。その場所としては、7世紀後半から10世紀までの大規模な官衙跡が発見されたりゅうおうぼた竜王畑遺跡の存在や平安時代後期の史料にみえるたかごう「高国府」の地名などから、現在の上野丘一帯が有力視されている。



古代の官衙遺跡と社寺

また、大型の掘立柱建物跡や墨書土器・円面硯などの遺物が発見された下郡遺跡群が大分郡衙、同様な遺構・遺物が確認された城原・里遺跡が海部郡衙正庁の場所に比定\*されている。大分市国分には、天平13年(741)聖武天皇の詔により建てられた「豊後国分寺跡」があり国の史跡に指定されている。発掘調査により、東西約182m、南北約300mの広さを有する寺域や、伽藍を構成する建物跡などが確認された。豊後国分寺の七重塔は、現存する礎石列から、高さ67mと想定されており、全国の国分寺の中でも屈指の高さを誇っていたことが分かっている。神社に関しては、『延喜式神名帳』には、西寒多神社が大社、早吸日女神社が小社として記されており、また『柞原八幡宮文書』によると、天長7年(830)延暦寺僧の金亀和尚が宇佐八幡宮の分霊を勧請して由原八幡宮を創始している。

\*比定:他の類似のものとは比べて推定すること。

### ③中世

#### ■大友氏の沿革

中世の大分市の歴史は、大友氏を中心に展開していった。初代大友能直は相模国大友郷に生まれ、その後、源頼朝の近臣である中原親能の養子となった。文治5年(1189)の奥州藤原氏追討では、初陣を飾り頼朝から信頼される。その後、本貫地である相模国大友郷地頭郷司職をはじめ、筑後・豊後の守護職や豊後大野荘地頭職などの所職を得たと考えられている。

大友氏第3代大友頼泰は、豊後国守護として、仁治3年(1242)に鎌倉幕府の『御成敗式目』を参考にした『新御成敗状』28箇条を定めるなど豊後国の統治を行った。また建長6年(1254)には現在のうえの台地付近とみられる「高国府」の地頭職を取得して、豊後を治めるための守護所(居館)の建設を進めたとみられる。さらに蒙古襲来では、文永8年(1271)九州へ下向して異国警固の指揮を執り、文永11年(1274)・弘安4年(1281)の2度にわたる蒙古軍との戦後も鎮西談議所の四奉行の1人として博多に留まっている。



電王畑遺跡から出土した豊後国司館の復元想定図(高橋信武氏作画)

上野電王畑遺跡復元想定図



海部郡衙正庁と比定される遺構(城原・里遺跡)



豊後国分寺跡



大友頼泰の墓(大分市指定史跡)



この蒙古襲来を契機に九州に影響力を強めた大友氏は、豊後国へ移住し定住したといわれ、その場所は上野台地上に想定されている。この頼泰の菩提寺が大分市岡川にある常楽寺で、寺の近くには彼の墓とされる市の史跡に指定された五輪塔が伝わっている。

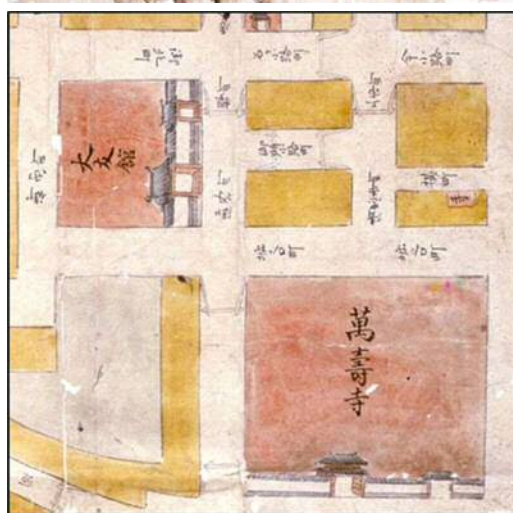
徳治元年(1306)には第5代大友貞親が大規模な禅宗寺院である万寿寺を府内に創建し、同寺は建武年間(1334~38)に十刹に列せられた。15世紀後半の文献には、100余人の僧侶が住み諸堂も完備した富貴の寺として紹介されている。戦国時代の府内のまちを描いた絵図『府内古図』(江戸初期作成)によると、大友館の南東の大分川沿いに広大な万寿寺の敷地が描かれており、推定地の発掘調査では13世紀後半~14世紀前半頃の白磁・青磁や14世紀中頃の瓦葺き建物跡が確認されていることなどから、万寿寺が同地に創建されたことは確実とみられる。

鎌倉幕府滅亡後、南北朝の争乱の中で、第8代大友氏は北朝方となり、菊池氏などの南朝軍の攻撃に対抗するため高崎山山頂に高崎城を築城したといわれる。

## ■大友館と豊後府内

1580年代の府内のまちの様子を現した『府内古図』によると、まちの中央に大友館が描かれ、その場所は国指定の史跡「大友氏遺跡」(大友氏館跡)とされて現在発掘調査と史跡の整備が進められている。発掘調査によれば、第21代大友義鎮(宗麟:1562年以降は宗麟と表記する)・第22代大友義統の最盛期の館は、200m四方の敷地を有し、その中に戦国大名では類例をみない5,000㎡を越える広大な池庭を築いていたことが確認されている。同じ地点では、14世紀末の第10代大友親世の時期にあたる「かわらけ」の大量廃棄や建物遺構が確認されており、そうした建物跡が天正14年(1586)に島津氏の侵攻で館が焼かれるまで連綿と築かれつづけていたことが判明している。このことから大友氏は、親世以降、水上・陸上交通の要衝である平地のこの場所に守護所を移して代々の居館にしたものと考えられている。

天文20年(1551)義鎮(宗麟)の招きでフランシスコ・ザビエルが大友館を訪問するが、これを機に府内のまちには、教会や病院、コレジオが建てられ、南蛮船も来航して珍しい異国の文物を伝え、南蛮文化が花開いていった。館やまちの発掘調査では、そうした南蛮文化を物語る輸入陶磁器やキリシタン遺物などが数多く発見されている。



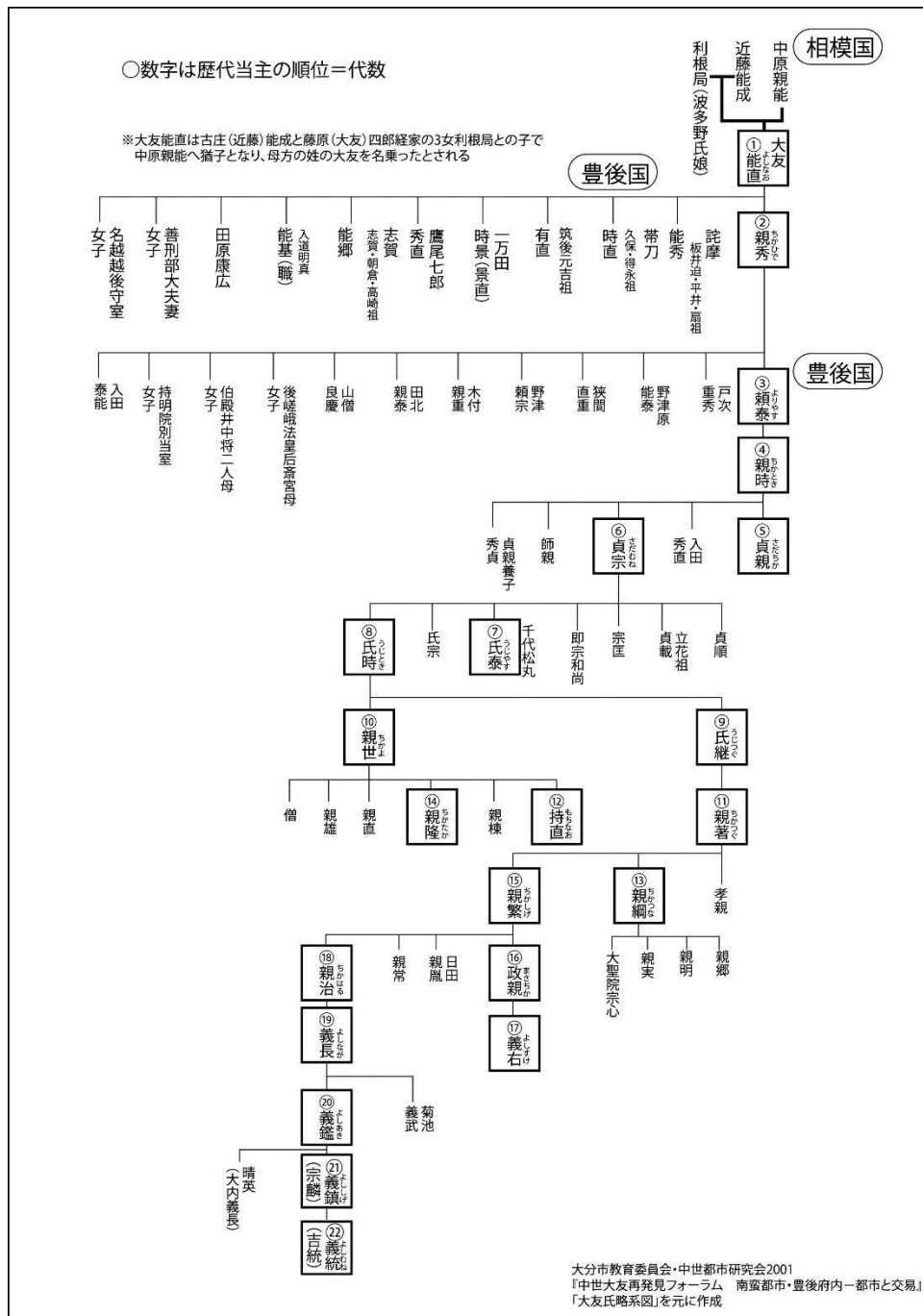
『府内古図』(上)と大友館周辺部分(下)



旧万寿寺跡から出土した鬼瓦



高崎城跡（高崎山山頂部）



大友氏系図



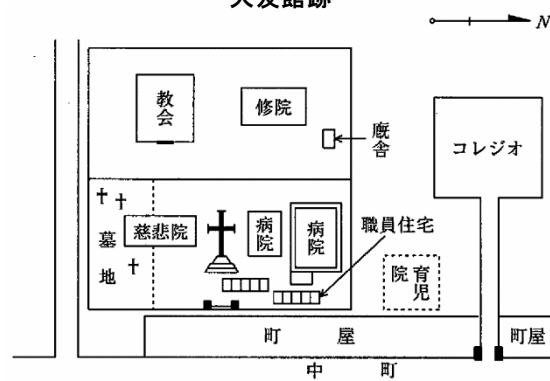


戦国時代の府内発掘調査地点





大友館跡



1584年当時の推測図  
キリスト教関連施設配置推測図



出土したキリシタン墓



大友館跡庭園復元図



出土した貿易陶磁器



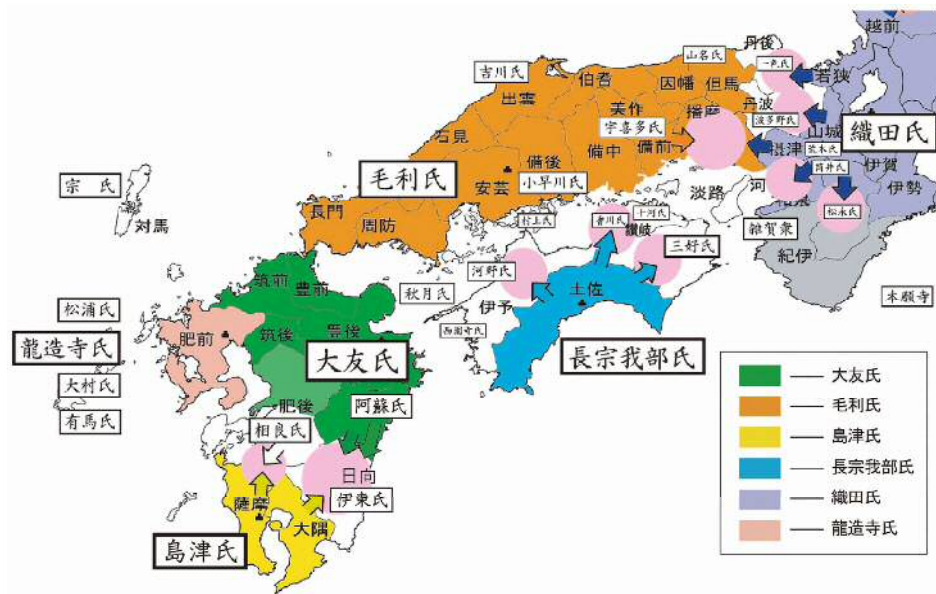
出土したキリシタン関連遺物

『府内古図』によると、館を中心に格子状に道路が走り、その道路に沿って40余町が築かれていた。当時その各町に職人・商人・武士などが混在して居住していたことが古文書や発掘調査の成果などから分かっている。また、万寿寺をはじめ大智寺・善巧寺などの10余の寺院があり、多くの僧侶がいたことや、唐人町や教会が築かれて中国人・西洋人も居住する国際色豊かなまちであったこともうかがえる。第22代大友義統が文禄4年(1595)に記した『当家年中作法日記』によると、40余の町は4つの町組にまとめられ、それぞれの町組に「乙名」と呼ばれた町役人がおり、6月15日の「祇園会」では町組ごとに曳山を1つずつ出していたとある。そのほか万寿寺大工・山崎・惣大工の山も出て、あわせて7つの山が町中を恒例で巡行したとある。また、昔は大友氏自らも疫病退散を願って山を1つ出していたともあり、大友氏がこの祭りを振興していたことが分かる。



## ■大友氏の衰退

宗麟は、最盛期に九州6国の守護職を手に入れ、博多を含む北部九州の支配を進めたが、天正6年(1578)日向(現:宮崎県)に侵攻して島津氏に敗北を喫し、それ以降家臣の反乱が相次ぐなど領国の支配が乱れた。力を強めた島津氏は天正14年～15年(1586～1587)豊後に侵攻し、「戸次川の戦い」で豊臣秀吉から派遣された仙石秀久・長宗我部元親・長宗我部信親・十河存保と大友義統の連合軍は島津軍に大敗、府内は占領され焼かれてしまった。その後秀吉の九州征伐によって大友氏は滅亡を免れたものの、宗麟は津久見(現:大分県津久見市)で死去し、大友義統は豊後一国のみを所領することを認められた。



戦国大名の支配領域



戸次川の戦いの古戦場と鶴賀城跡

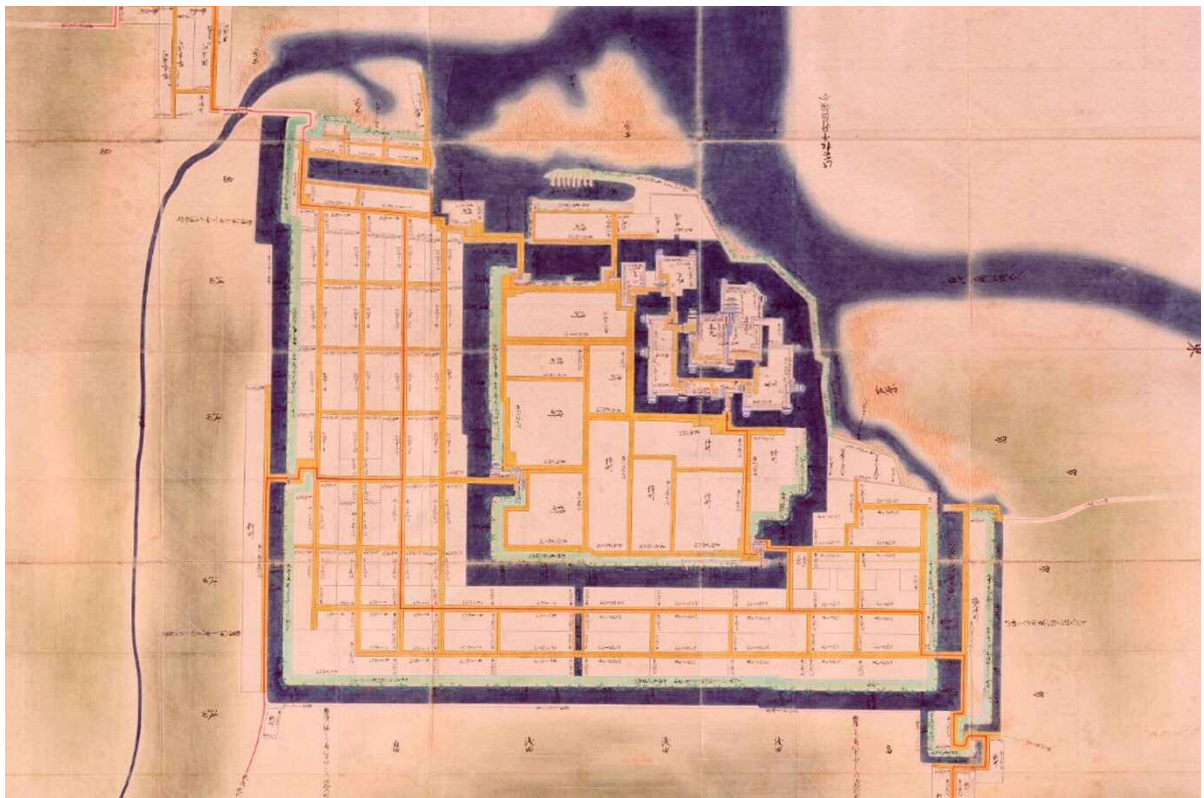
大友館・豊後府内と大分市の主な中世山城

きんせい  
④近世

■府内城と府内藩の変遷

文禄2年(1593)大友義統よしむねが朝鮮侵攻での失態を理由に豊臣秀吉の命により豊後ぶんごから追放され、秀吉の直轄領(太閤蔵入地)となった。豊後国ぶんごのくにでは、秀吉の家臣である武将たちが大名や代官として入り、小藩が分立する体制に向かっていった。

府内には、文禄3年(1594)早川長敏はやかわながとしが大分郡1万2000石を与えられて入っている。慶長2年(1597)には早川氏に替わって石田三成の妹婿といわれる福原直高ふくはらなおたかが臼杵6万石と大分・速見・玖珠6万石の領地、合計12万石を与えられて府内に入り、大分川河畔の「荷落に落ち」を新たに城地に定め、府内城の築城をはじめた。慶長4年(1599)に三階櫓と武家屋敷が完成し、これを機に直高は「荷落」の地名を「荷揚にあげ」と改め、城名も「荷揚城」と名づけたといわれている。しかし、同年直高は領地を没収され、再び早川長敏が2万石で府内へ入封するが、慶長5年(1600)関ヶ原の戦いで西軍について敗れ、領地を没収された。



豊後府内城之絵図 (正保元年 (1644))

早川氏の後に2万石を与えられて府内に入った竹中重利たけなかしげとしは、荷揚城の築城を再開し、旧知の熊本藩主加藤清正かとうきよまさに石垣職人を求め、また伏見から瓦師、大坂から大工・工匠を呼び寄せ、慶長7年(1602)天守・諸櫓をはじめとする府内城の全容を完成させた。さらに同年、城壘外に城下町(城壘外の東西10町、南北9町の区画に40余の町を整備)を築き、戦国時代の府内のまちから寺院や町屋を移転させた。こうした福原氏から竹中氏にかけての築城当初のものとみられる石垣が、大分市保健所建設に伴う発掘調査(府内城城下町跡16次調査)で発見されている。重利の跡を継いで元和元年(1615)藩主となった竹中重義たけなかしげよしは、同9年(1623)越前国福井(現:福井県)より



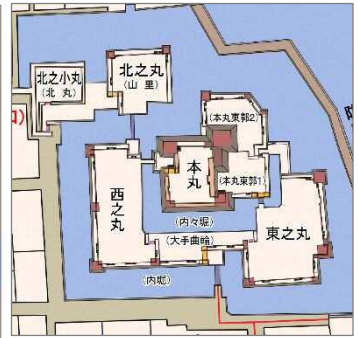


- 凡
- 堀・舟入・川
  - 街路・道路
  - 大手へのメインストリート
- 例
- 石
  - 垣
  - 土居(土塁)
- 旧府内町から移転した町・寺院
- 府内町(組)
  - 千手堂町(組)
  - 寺 院
  - 笠和町(組)
  - 松末町(組)

府内城下町の復元図

※ 「大分市史中巻」付図Ⅳ 府内城下の復元図をベースに  
 虎口や道路、地形など「正保城絵図 豊後府内城之絵図」  
 の情報を基に一部変更している。

※ 門内47町の内、19町は旧府内にあった町名。  
 ※ 近世城下町へ移転後変更された町名は、工座町→捨  
 物町、御西町→西町である。  
 ※ 笠和はもともなかった町名。



府内城部分拡大

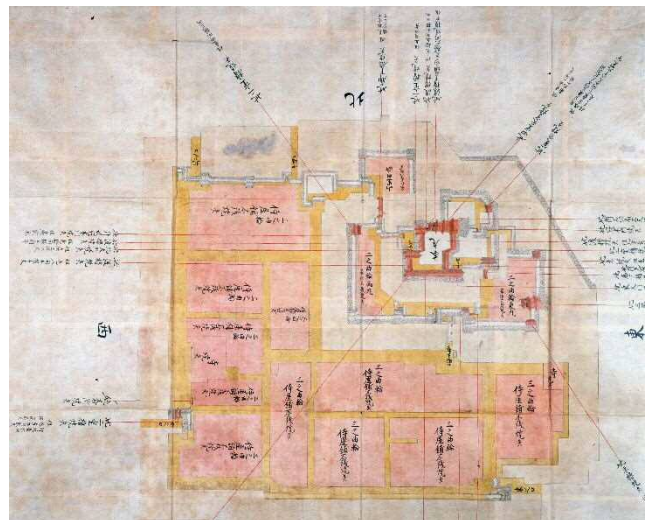


府内城築城当初と推定される石垣  
 (府内城城下町跡 16次調査)

豊後に追放された松平忠直(一伯)を預かり、寛永6年～10年(1629～1633)には長崎奉行を務めたが、奉行時代の職務上の不正により、寛永11年(1634)に切腹を命ぜられた。

その後、日根野吉明が下野国壬生(現:栃木県壬生町)から府内へ2万石で入封する。吉明は、城下町振興を目的とした由原八幡宮放生会の祭礼市を「浜の市」として再興したほか、初瀬井路の開削も行い、領内の耕地拡大と生産向上に努めている。しかし、明暦2年(1656)吉明が亡くなると日根野家は断絶した。

日根野家の後に万治元年(1658)大給松平忠昭が2万2,000石で高松(現:大分市日岡)より移り、これ以降、明治4年(1871)の廃藩置県まで10代にわたって大給松平氏が府内藩を治めた。第4代近貞の代に起きた寛保の大火(寛保3年(1743))では、天守をは



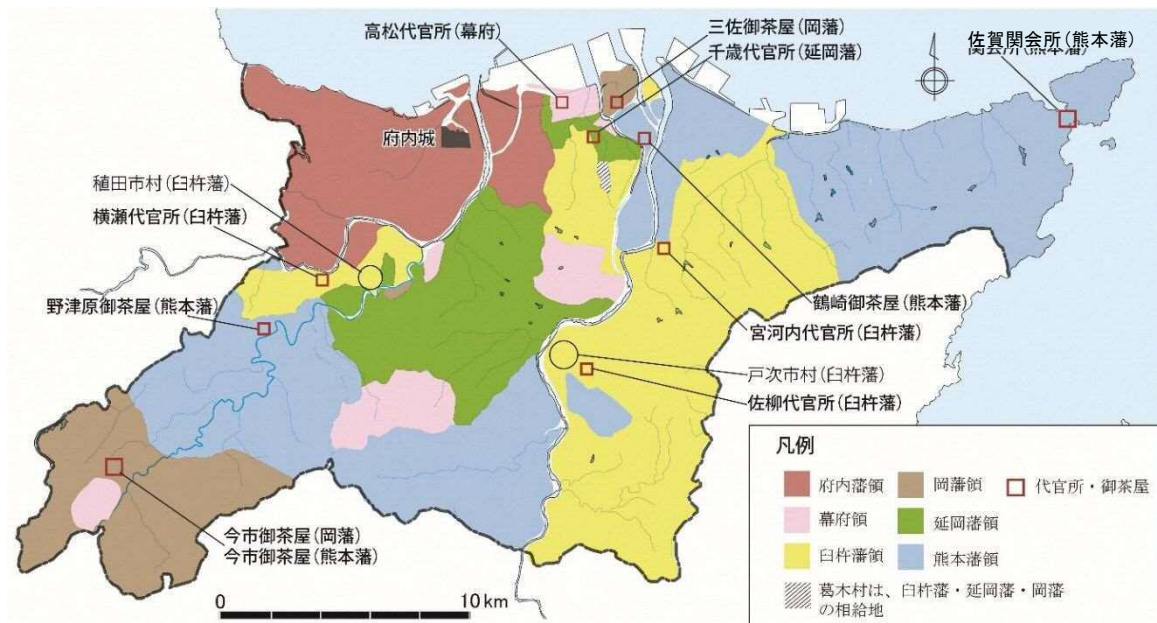
寛保の大火(寛保3年(1743))後被災状況を描いた絵図

じめ<sup>やぐら</sup>櫓などの22施設と東の丸・西の丸・山里丸<sup>やまさとまる</sup>の御殿が焼け落ち、また三の丸の武家屋敷77軒全てと外曲輪<sup>くるわ</sup>の武家屋敷181軒が焼け、さらに町屋1079軒が焼失するという大きな被害を受けている。この時に焼失した天守や諸櫓は以後再建されず、府内城の様相も大火前とは大きく様変わりすることになった。府内城を襲った相次ぐ災害に加え、他藩領の城下町や在町の発達もあり、18世紀以降府内城下町は人口が減少し、衰退していく。次第に財政危機が深刻となったが、天保10年(1839)以降、日田の豪商<sup>ひろせきゆうべえ</sup>広瀬久兵衛の指導のもとで藩政改革が実施され借財<sup>しつ</sup>の整理<sup>しつ</sup>や七島<sup>しつ</sup>蘭<sup>らん</sup>※・櫓などの殖産興業により財政の立て直しを行った。

※七島蘭: 畳表の材料。イ草に比べ強度・耐焦性に優れ主に柔道の畳として利用。

## ■小藩分立

江戸時代の大分市域には府内藩領のほか、臼杵藩領<sup>うすき</sup>(現:大分県臼杵市他)・岡藩領(現:大分県竹田市他)・熊本藩領<sup>のべおか</sup>・延岡藩領(現:宮崎県延岡市他)の4つの領地と幕府領が入り混じっていた。



大分市域の各藩領

## 臼杵藩領

臼杵藩は慶長5年(1600)に、美濃国郡上八幡<sup>みののくにぐじょうはちまん</sup>(現:岐阜県郡上八幡市)の領主であった稲葉貞通<sup>いなばさだみち</sup>が臼杵へ領地替えとなったことにはじまり、のちに大分郡を新たに領地として追加された。宮河内<sup>みやかわち</sup>・横瀬<sup>よこせ</sup>・佐柳<sup>さなぎ</sup>に代官所<sup>おおのがわ</sup>が置かれ、大野川河口の家島<sup>いえしま</sup>は年貢の積出地の役割を担っていた。また、他藩との領地に接する場所に境界を示す「境界石」を設けており、現在2基が残されている。農村での商売は禁止されていたが、「植田市村」及び「戸次市村」は商売が許された「在町<sup>ざいまち</sup>」として、様々な人々や品物、文化が集まり栄えた。



臼杵藩境界石柱「従是西臼杵領」



## 岡藩領

岡藩は、文禄2年(1593)に播磨国三木(現:兵庫県三木市)城主中川秀成が岡へ領地替えとなったことにはじまり、大分市域では5ヶ村を領有した。乙津川河口の三佐に藩主の休憩所であり役所でもある「御茶屋」を設け、参勤交代及び交易のための港が整備された。また、肥後街道沿いにあたる今市村にも「御茶屋」を設け、その周辺に宿場を整備した。現在も石畳道が残され大分県の史跡に指定されている。今市村は岡藩の領地であったが、参勤交代で熊本藩も通行することから熊本藩の「御茶屋」も設けられていた。

熊本藩初代藩主加藤清正が今市村に立ち寄った際に、岡藩が「そば」を出して以来、藩主が細川氏に代わってもそのならわしは続けられた。

## 熊本藩領

慶長6年(1601)、熊本藩主加藤清正は瀬戸内海への航路確保のため鶴崎を領有することを幕府に願い出て、豊後国大分郡・直入郡・海部郡が領地となった。清正是乙津川を埋め立てて鶴崎に港や町をつくり、肥後街道沿いにある野津原及び鶴崎に藩主の休憩所である「御茶屋」を設けるなど豊後国内の熊本藩領地の整備を進めた。鶴崎は、熊本藩の豊後国における政治・経済・軍事の中心として栄えた。また、佐賀関にも熊本藩の役所である「佐賀関会所」が設けられ、参勤交代の折には藩主の御座船が風待ちのため寄港する港が整備された。また佐賀関は大型船の入港も可能であった。文久4年(1864)には、アメリカ・イギリス・フランス・オランダの4ヶ国による下関攻撃を阻止するため、勝海舟と坂本龍馬を含む一行が佐賀関に上陸し「肥後街道」を通過して長崎へ向かっている。

## 延岡藩領

豊後国において延岡藩が領地を領有したのは正徳2年(1712)で、三河国吉田藩主(現:愛知



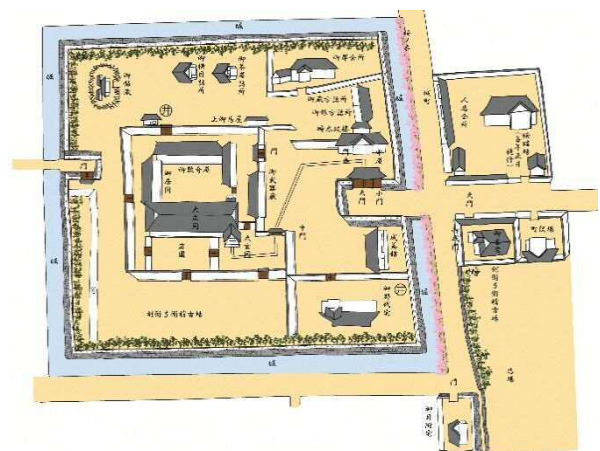
三佐御茶屋跡 (太刀振神社)



岡藩領今市宿の参勤交代道路 (県指定史跡)



鶴崎御茶屋跡 (鶴崎小学校・鶴崎高校)



鶴崎御茶屋跡復元図

県豊橋市)であった<sup>まきの なりなか ひゅうがのくに</sup>牧野成央が日向国延岡(現:宮崎県延岡市)へ領地替えとなったときに、吉田藩の石高より不足分を豊後国の幕府領より譲り受けたためである。大分郡千歳村(現:大分市千歳)に延岡藩の豊後国における役所である「千歳役所」<sup>せんざいやくしょ</sup>が設けられた。文化3年(1806)に延岡藩領の立小野村(現:大分市判田地区立小野)の農民が草刈場をめぐり隣接する村と争いになり、その解決を要求するために全員が幕府領の村へ逃散した。その時に作成された「傘連判状」<sup>かさつらぎ</sup>が残されており、大分市の有形文化財に指定されている。

### 幕府領

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦い以降、豊後国のうち大名へ分割された残りが幕府領となり、港や交通の重要地点を領有した。豊後国には幕府の代官所が日田(現:大分県日田市)及び高松(現:大分市日岡)に置かれ、2人もしくは1人の代官が配置され、高松代官所周辺には町場が整備されていた。幕府領は年貢も低く、流通や金融への統制もゆるやかだったため、豪商や豪農が多く存在した。寛政11年(1799)高松代官所の支配地は肥前国島原藩(現:長崎県島原市)が幕府の支配を代行する「預かり地」となり、幕末には熊本藩預かりとなり明治維新を迎えた。

### 相給の村

小藩領が錯綜した江戸時代の<sup>あいきゆう</sup>大分市域には、1つの村を複数の藩領域に分けて支配する「相給」の村もあった。

市内中部の<sup>かつらぎ</sup>葛木村は江戸時代初めには臼杵藩、岡藩、幕府領に分かれていたが、18世紀初め以降幕府領が延岡藩領となり、幕末に至る。この地域はクリシタンが多く分布しており、万治3年(1660)から天和2年(1682)までの間に幕府領・臼杵藩領で154人が召し捕られ、死罪46人、牢死34人を出した。

幕末の石高を示す「旧高旧領」<sup>きゅうだかきゅうりょう</sup>によると臼杵藩領148石余、岡藩領28石余、延岡藩領102石余となっていた。



千歳役所跡



高松代官所跡(日岡小学校)

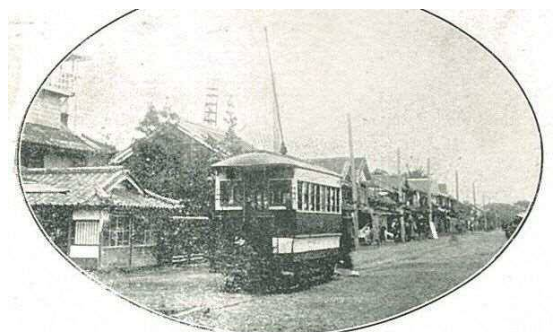


きんだい  
⑤近代

明治政府は廃藩置県を行い、全ての藩が県となり大分市域も府内県・臼杵県・岡県・熊本県・日田県(旧幕府領と旧延岡藩領)となった。のちに統廃合を経て明治4年(1871)11月大分県が誕生した。県庁が旧府内城に置かれ、中世における大友氏の「府内のまち」以来現在の大分市が再び大分県の中心都市となった。明治6年(1873)より明治9年(1876)にかけて旧府内城の中堀及び外堀が埋められ市街地が拡大し現在の県都大分市が形づくられていくことになった。県庁所在地となった旧府内城下町は、明治5年(1872)の大区小区制の施行にともなって荷揚・松末・笠和・同慈寺・南勢家・千手堂の町からなる「第3大区第1小区」の行政区となり、明治8年(1875)の町村の統廃合により上記7町は「大分町」として1つにまとめられ、その後、明治11年(1878)の大区小区制の廃止によって、正式に「大分町」が発足した。明治40年(1907)周囲の西大分町・荏隈村・豊府村と合併を遂げて人口2万5,971人を抱えることになった。大分町は、その後の人口増加もあり、明治44年(1911)市制を敷き、九州では10番目、全国では61番目の市「大分市」となった。明治33年(1900)5月には、九州で初めて路面電車が**大分―別府間**を走った。後に“別大電車”の名前で市民に親しまれることになるこの電車は、当初大分―別府**浜脇**の10.6kmの間を約1時間で走行した。明治35年(1902)に南新地(現:竹町入口)まで、大正7年(1918)には大分駅まで延長された。また全国各地で建設が進められていた鉄道も、明治28年(1895)豊州線(現:日豊本線)が小倉―**行橋**間に敷かれ、その後も延長され明治44年(1911)に大分駅が開業、大分市と北九州とが鉄道でつながられた。また大正3年(1914)に大分―**中判田**間の**犬飼**線(現:豊肥本線)が開通し、翌大正4年(1915)に大分―小野屋間



県庁が置かれていた府内城東ノ丸御殿



豊後電気鉄道大分驛  
路面電車(明治末頃)

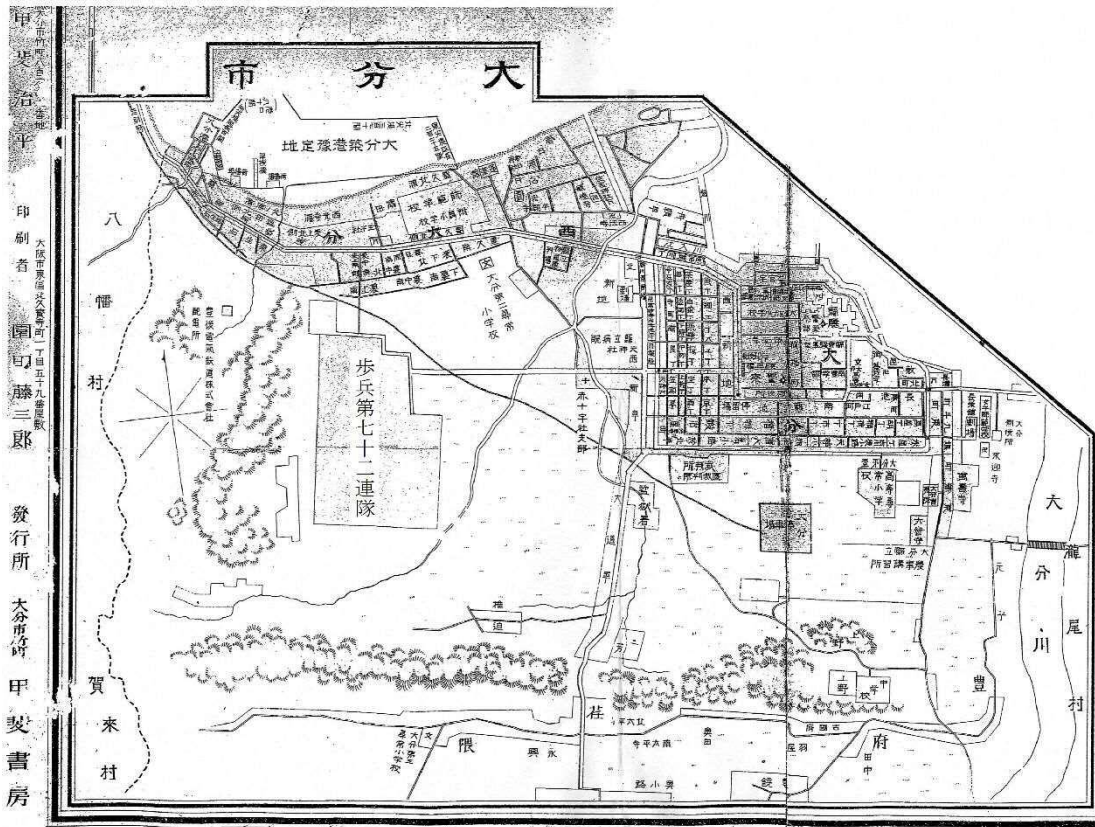


開業直後の大分駅



明治40年(1907)頃の大分市(大分町)中心部付近





明治44年(1911)頃の大分市街図



昭和8年(1933)頃の大分市街広域図



(現:久大本線)も開通して、大分市を起点にした鉄道網が整備された。大正3年(1914)大分市生石<sup>いくし</sup>の大分紡績<sup>ぼうせき</sup>会社(現:フジボウテキスタイル株式会社大分工場)の設立や大正6年(1917)大分市大道町<sup>おおみちまち</sup>の片倉組大分製糸所の開業など大規模な機械工場が造られた。

大正4年(1915)2,000t級の船の停泊が可能な大分築港(現:西大分港)が完成し、陸・海の交通網の整備が進んだ。また、二十三銀行本店(現:大分銀行赤レンガ館。大正2年(1913)に現在の中央通り沿いに新築)や株式会社大分銀行本店(大正4年(1915)に竹町<sup>たけまち</sup>に新築)のモダンな西洋式の建造物が相次いで建てられ、近代的な都市が形づくられた。

大正10年(1921)には府内城西之丸に洋風の新県庁舎を建設し、さらなる産業と都市の発展を図るために、第14回九州沖縄八県連合共進会が大分市・別府市を会場に盛大に開催された。昭和9年(1934)には竹町に県下最初<sup>いちまる</sup>の一丸デパートが開業、翌昭和10年(1935)には現中央通りにトキハ百貨店が開店、大分市は東九州の重要な拠点都市として大きく発展した。

明治41年(1908)に大分市駄原<sup>だのはる</sup>に大分歩兵第72連隊(のち47連隊)が、日中戦争のさなか昭和14年(1939)には大分海軍航空隊が開設され、関連する軍需工場が建設された。昭和16年(1941)太平洋戦争がはじまり、戦争末期には軍の施設を中心に空襲が繰り返された。昭和20年(1945)7月16日から17日にかけてアメリカ軍B29爆撃機の大空襲を受け、市の中心部は一夜にして焼野原となった。

## ⑥現代

終戦後すぐに大分県・大分市を中心とした「大分市復興委員会」を立ち上げ、特別都市計画法に基づき『復興5ヶ年計画』を作成、昭和21年(1946)に総理大臣の認可を受けた。これを機に大分市ではこれまでにない思い切った復興事業が行われた。市街地のメイン道路であった「中央通り」と「昭和通り」はそれまでの15mから30mに拡幅され、新たに大分駅前と同じく30m幅の「産業通り」が整備された。また、まちの中に市民の憩いの場となる「若草公園」・「ジャングル公園」・「遊歩公園」の公園が新設された。



二十三銀行本店 大正2年(1913)



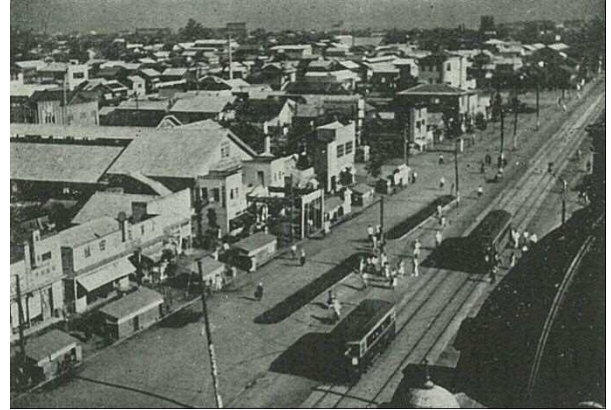
第14回九州沖縄八県連合共進会  
大正10年(1921)



府内城西之丸に建てられた新県庁舎  
大正10年(1921)



戦前の大分市街地のにぎわい



昭和20年(1945)終戦直後(左)と昭和25年(1950)の大分市中心市街地(右)

こうした独創的な事業と急速な復興が認められ、昭和25年(1950)7月に大分市は全国115の戦災都市の中から岐阜市・松山市とともに復興のモデル都市に指定された。昭和30年代に入り、県民所得と雇用の増大を図る大分県は、大分・<sup>つるさき</sup>鶴崎臨海工業地帯の造成を計画し、昭和34年(1959)から同地域の海岸部の埋め立て工事を開始した。昭和36年(1961)大分県を中心として、大分市とその近隣6市町村鶴崎市・<sup>だいなん</sup>大南町・<sup>おおぎ</sup>大分町(現:<sup>わさだ</sup>植田地区・<sup>かく</sup>賀来地区の一部)・<sup>おおざい</sup>大在村・<sup>さかのいち</sup>坂ノ市町を合併する構想が出され、昭和38年(1963)に合併し新「大分市」となった。さらに翌昭和39年(1964)には、新産業都市建設促進法による「新産業都市」の指定を受け、九州石油コンビナート、新日本製鐵が相次いで操業を開始し、工業都市へと大きく様変わりした。

その後、平成9年(1997)に中核市の指定を受け、平成17年(2005)には<sup>のつはる</sup>野津原町と<sup>さかのせき</sup>佐賀関町を編入合併した。これにより本市は、東西50.8km、南北24.4km、面積502.39km<sup>2</sup>となり、九州の県庁所在地としては、宮崎市、鹿児島市に次ぐ3番目の面積を有する市となっている。



整備直後の遊歩公園(昭和30年(1955))



昭和47年(1972)の臨海工業地帯